るが、視覚による場合と聴覚による場合とは自らちがっている。視覚の場合には色彩の強いところや、誇張的な表現のものを描く、たとえば、松の木が非常に大きく描かれているので、これに興味を持って、紙芝居の場合は松の木が大きくなったところを描く、(童話の場合は犬の墓に小松を植えたところを描いている)それから童話の場合はリズミカルな言語表現のところが描かれているのは聴覚による印象が強いからである。

3. 結論的にみて——童話と紙芝居とは全くその性質がちがい、幼児の受けとり方がちがっている。この意味において、童話と紙芝居(その外視聴覚教材)はできるだけかたよらないように、各種のものがとり上げられなければならない。

最近の保育の実際を見ると童話が少くなって、紙芝居が多く与えられている傾向があるが一考を要するものと思う。

子どものしつけに関する一調査

東京家政大学児童研究室
森　重　敏
上原万里子
内山綾子

I 目的

この研究は、東京家政大学付属みどりが丘幼稚園における、幼児のしつけに関する実態の調査を目的とし、しつけの実態を(1)子どもの生活実態と、(2)母親の教育態度との両面から考察したものである。この結果の理解を容易にするために、都内の二つの小学校の一年生について同様の調査を行い、さらに奄美大島の小学校一年生と幼稚園児について調査し比較した。

II 方法および手続

方法　質問紙法

対象　みどりが丘幼稚園児の母親　三一名

比較対象　四谷第四小学校一年生の母親四四名、池袋第三小学校一年生の母親四七名、奄美大島(沖永良部島和泊町)の幼稚園および小学校一年生の母親一二六名。

手順

各施設に母親に集ってもらい質問紙を配布して、問題を一項目づつ解説しその場で記入してもらった。質問は主に多肢選択法による。

調査期間　みどりが丘・三一年一

(表　1)

	みどりが丘幼稚園 大島	東京小学校	奄美幼稚園	奄美小学校
	%	%	%	%
るすばん	46.8	52.2	73.0	51.0
田や畑に食事やお茶を運ぶ	0	0	50.0	45.0
水くみ	3.2	4.3	46.2	25.0
子もり	6.4	6.4	59.5	58.0
家禽家畜のせわ	6.4	2.1	59.5	39.6
草刈り	0	0	23.1	19.6
お使い	86.4	87.2	87.5	96.0
家の掃除	25.6	31.9	73.0	67.0
たきぎとり	0	0	34.6	16.0
食事の用意や後片づけ	35.2	27.7	34.6	27.6
草むしり	16.0	0	49.0	29.0

二月、池袋第三小学校　三二年二月　四谷第四小学校　三二年三月
奄美大島　三一年八月

Ⅲ　結果

その一　子どもの生活実態を中心として

一、家庭での手伝い

みどりが丘の園児たちは、家庭においてどんな手伝いができるかみると、表1のように「お使い」が最も多く八六・四％がしている。二番目が「るすばん」で五六・八％、次ぎが「食事の用意や後片づけ」で三五・二％、「家の掃除」が二五・六％で、そのほかはごく少くなっている。この傾向は東京の小学校一年生と大体同様で、東京のこの年令の子どもたちの一般的な傾向と思われる。この傾向をなおはっきりさせるために、奄美大島の子どもたちと比較してみると、東京と奄美で共通しているのは、「お使い」「るすばん」「食事の用意や後かたずけ」の三項目で、差の著しいのは「子もり」「家畜のせわ」「水汲み」などである。奄美のこどもたちはこの他にも、「田や畑に食事やお茶を運ぶ」「草かり」「たきぎとり」など多くの仕事があり、全体としては東京のこどもたちは仕事の種類も少なく、率も低くなっている。次ぎに男女の差をみると、男児に多いのは「るすばん」だけで、他は全部女児の方に多くなっている。

二、就寝・起床の時刻

みどりが丘での就寝時刻は、八時から九時のものが最も多く、八〇・七％を占めている。この結果は、東京の小学校や奄美でも大体等しくなっている。

つぎに起床時刻では、一番多いのが七時（三二・三％）つぎが八時（二九・〇％）となっている。これを奄美のこどもたちとくらべると、奄美の幼稚園児は五時半から六時半におきるものが大部分で、みどりが丘の方が起床時間が相当に遅く、約一時間半の差がある。

三、雑誌について

みどりが丘では九〇・三％のものが、何かの雑誌をとっており、その率は東京の小学校（七八・七％）よりも高くなっている。奄美との差はとくに激しく、奄美の幼稚園では雑誌をとっているものは一人もなく、小学校でも二九・〇％しかとっていない。

雑誌の種類については、みどりが丘では五三・五％が幼稚園、幼稚園ブックなど年令相応のものをとっているが、二六・〇％のものは小学校一年生、小学校二年生などの年令よりいくぶん上のものをとっている。

四、けい古ごとについて

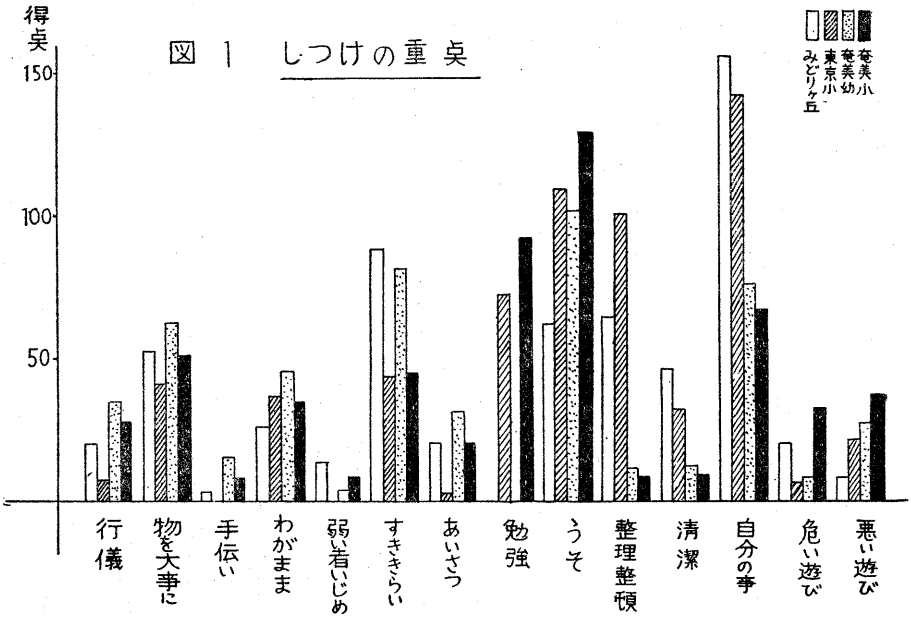
幼稚園や学校にいく以外に、何かおけいこをしているかについては、みどりが丘では、男児三一・四％、女児五三・三％がお稽古をしている。東京の小学校では、男一八・二、女四〇・〇％で、みどりが丘の方が相当に高率である。なお奄美にはけい古をしているものはない。

けい古の種目についてみると、ピアノ、絵が男女ともに多く、女児にはこの他にバレーや日本舞踊が割合多く男児では習字やヴァイオリンが多い。

その二　母親の教育態度を中心として

一、日常生活場面での子どもに対するしつけの態度

a.　母親が子どもに注意を与えるときの方法について、みどりが丘では「しましょうね」と好ましい云い方をする場合の方が「していけません」という禁止的な注意の仕方の回数よりも多いというものと、その反対の「してはいけません」の方が多いというものとが、同数で、いずれも四八・四％となっている。



一方奄美では「しましょうね」と好ましい方法を多く用いている母親は、三〇・四％になっている。

b. しつけに対して、子どもの理解や、同意を得てしつけを行う、好ましい態度と、何でも親のいいつけには無条件で従わせるという態度とについて調べた結果は、みどりが丘では六六・七％の母親が、前者であるに対して、奄美では二三・二％で、過半数は親のいいつけには、必ず従うことを要求している。

二、母親の教育方針

しつけの目標となる一四項目について調べた結果、図1のように、みどりが丘では「自分のことは自分ですること」に最も重点がおかれ、「好き嫌い」「整理整頓」の順になっている。奄美では「うそをいわないこと」に一番重点がおかれている。小学校でも東京と奄美についてみると、同じような傾向がみられる。このことにより、みどりが丘では「子どもの心理的独立を援助しよう」という点にしつけの方針をおいているものが多いが、奄美では、観念的、理想主義的で、「正直で礼儀正しい人格」をめざしているものが多いように思われる。

三、罰の与え方

罰の方法について、九項目を挙げて調べた結果、一番よく用いる方法は、「口で叱ったりにらんだりする」方法で、みどりが丘が六四・五％、奄美および東京の小学校でも、ほぼ同様である。次にみどりが丘では、「相手にしてやらない」が多く、体罰はごく稀にしか用いられていない。

四、しつけの相談相手

母親が子どものしつけについて、相談する相手は、子どもの父親に相談するというのが一番多く、次が幼稚園、小学校の先生となっ

（表 2）
しつけの相談相手

	みどりが丘	大島幼	東京小A	大島小
父親	93.5	76.9	95.7	78.0
祖父	3.2	15.3	4.3	8.2
祖母	12.9	15.3	8.5	26.0
おじ		15.3	16.6	5.0
おば	9.7	3.8	16.6	9.0
先生	45.1	3.8	23.4	26.0
保健婦		34.6		
産婆				1.0
医者	9.7		4.3	2.0
近所の人	3.2		12.8	4.0

ている。これはみどりが丘および東京の小学校、奄美の幼稚園小学校も同じ傾向にあるが、その率は表2に示すように、奄美では幼稚園、小学校とも東京より低く、そのかわりに奄美では、祖父母の比重が重くなっている。これは奄美では東京よりも「家」というものを重くみているほか、母親自身の確固たるしつけ方針を打ち出していないことを示すものと思われる。またみどりが丘および東京の小学校では、若干ではあるが、子どものしつけの相談相手として、「医者」の項が挙げられているが、大島ではほとんどない。

五、しつけの参考物

みどりが丘および東京の小学校の母親たちは、マスメディアのほか、いろいろのものがしつけの参考物として利用されているが、奄美では雑誌が最大の参考物で、種類に乏しい。みどりが丘では、何も参考にしないというのはわずかに三・二%であるが、奄美の幼稚園では二三・一%で相当のひらきがある。この開きは小学校になるとさらに大きく奄美では大半が何も参考にしていない。

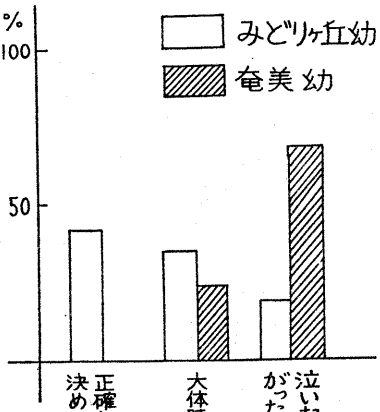
六、子どもの教育について両親の意見の相異の有無

みどりが丘では意見のくいちがいのあるものの方が多く六一・三%、奄美では無いものの方がずっと多く七三・一%となっている。小学校でも東京に両者のくいちがいが非常に多い。くいちがいのある場合の解決法は、大部分のものが「二人で話しあってきめる」という民主的な方法をとっている。

七、乳児期の栄養と授乳のしつけについて、

乳児期の栄養は、みどりが丘では母乳だけで育ったものは五八・一%であるが、奄美では全員一〇〇%である。このような顕著な相異は母親の健康状態によるものか、またはその他の事情によるものか明かでないが、地域差の著しいことが注目される。次に乳の与え方についても、図2にみられるように、両者に著しい差異が認められる。離乳について、最初に乳以外のものを与えた時期は、個人差の開きが大きいが、平均みどりが丘四・五か月、奄美九・一か月で約五か月のずれがみられる。また最初に与えたものが何であるかについてみると、奄美では「おもゆ」「おかゆ」「味噌汁」と種類に乏しいが、みどりが丘では「果汁」

図 2　授乳の方法



「牛乳」「スープ」「ウェハース」など十種以上が挙げられている。離乳完成時期も個人差が大きいが、平均みどりが丘一才五か月奄美一才一〇か月で、ここにも約五か月のひらきがみられる。

八、幼稚園、小学校への希望

子どもの教育について教師に望むことについては、みどりが丘の男児では「意志の強い子どもにする」と「おだやかな性格を作る」がいずれも三七・五%で一番多く、女児では、「おだやか」が四〇・〇%「意志」が二〇・〇%となっている。奄美の幼稚園では元気なからだの子どもにする」が五〇・〇%「よい趣味をもつよう」が一九・二%となっている。小学校についてみると、東京ではやはり「意志」と「おだやか」が多くなっているが、奄美では元気なからだ」が一番高い率を示している。これにより、東京では心理的、精神的健康を望み、大島では、身体的健康を望むことがうかがえる。

その三　家庭的背景を中心として

ここでは家庭の環境面からしつけの一側面を考察するとともに、本報告の概括を試みる。

まず家族関係、とくにしうととの関係から、みどりが丘と奄美とを比較しながら、母親のしつけ態度をみてみよう。

一、しうととの意見の相違

子どもの母親とそのしうととの間に、子どものしつけや教育の面で意見のくい違う場合のある点に着目して、しうとをもつ母親について意見の一致、不一致をしらべてみた。みどりが丘では不一致の場合が極めて多い（七五%）のに対し、奄美では一致の場合が極めて多く（八六%）、著しい対照を示している。（表3）

そのくい違う際の解決法をみると、みどりが丘の場合「自分の考え通りにする」という者が最も多く（五〇%）、「しうとの意見に従う」というのと「二人の間の相談で解決する」というのがいずれも同一割合（一六・七%）で極めて少ないのに対し、奄美では、「しうととの相談で決める」というのが極めて多く（七五%）それに次いで「しうとの意見に従う」場合（二五%）であり自「分の考え通りにする」というのは皆無である。（表4）

（表3）しうとと自分の意見の不一致

	奄美幼	みどりが丘幼
あるし	11.6%	75.0%
なし	86.0	25.0
その他	2.3	0

こうした傾向は、先の報告の「相談相手」に関する項目の結果をうらづけるもので、しつけ方針や態度において、みどりが丘の母親に独自性があるのに対し、奄美の方には祖父母への依存性があることを示すものではないかと思われる。

（表4）意見相違の解決（しうとと自分）

	奄美幼	みどりが丘幼
自分の考え通り		50.0%
しうとの意見	25.0	16.7
二人で相談	75.0	16.7
その他		16.7

二、教育関心度

子どもの教育に関する関心度をみるために、しうとと比べてどちらが熱心であるかという点から調べると、みどりが丘では「自分の方がしうとより熱心である」と主張する母親が極めて多く（六二・五%）自信の程を示し、「同じ位」というのは少なく（二五%）、さらに「しうとの方が熱心であるという者は極めて少ない（一二・五%）。これに対し奄美の場合では、「自分の方が熱心」「しうとの方が熱心」「およびどちらも同じ位」という者の割合がそれぞれ同一（三三三%）でしうとの立場を重視していることが推察される。（表5）

三、父と母との場合

（表5）教育的関心度（しうとと自分）

	奄美幼	みどりが丘幼
自分が熱心	33.3%	62.5%
しうとが熱心	33.3	12.5
同じ位	33.3	25.5

以上のような検討を父と母とに対して向けてみると、意見の不一致についてはみどりが丘が大いに有り（六一・三%）であるのに対し、奄美では「無し」が著しい（七三・一%）しかし意見相違の解決は何れも「二人の相談で解決」を計るとする割合が高い（奄美八五・七%、みどりが丘六一・三%）点では同一傾向を示している。

教育関心度については、みどりが丘の場合、主人と自分と同程度の熱心さを申立てているものが多い（五八・一%）のに対し、奄美では、丁度半々の割合（主人熱心五〇%、自分熱心五〇%）という結果となっている。ここでは、自分の存在を押さえることによって主人の存在を消極的に重みづけているといった傾向が、みどりが丘の側の母親にうかがえるようである。

四、しつけ担当者の役割

家庭で、誰がどのような面倒をみるかという点については、その仕事の内容によって、可成りの違いがあるが、一般に、母親は、殆んどすべての仕事にわたって第一位の役割を演じている。しかし、これまでのように、比較的に考察してみると、みどりが丘では第三図にみるように、父や女中の果たす役割が、相当大であるのに対し、奄美では、祖父母や姉の役割が比較的大である。こうした傾向は、家庭的環境による差異の著しい方面として注目される。

図3　誰がどのような面倒をみたか

	母	父	祖母	姉	女中
おむつ	−		− −	−	+ +
おもり	+ +	+ +	− −	− −	+ +
御飯	+	+	−	−	+
着物	−	+	−	− −	+ +
ふろ	−		+ +	−	+
夜ねかす	−			−	+ +
おやつ・小遣い	+ +	− −	− −	−	+

＋……みどりが丘の比重。　－……奄美の比重。

五、家庭環境調査

以上のように、子どもの生活の実態なり、母親の教育態度なりにおける、特性や差異は何によるものか、ここで決定的な因果関係を見通すことは困難であるが、この問題へ接近する手掛りとして、基礎的な家庭環境調査も試みた。家族数、同胞数、家の職業、教育程度、住居の状況、経済状況などを調べてみると、詳述する余裕がないが、東京と奄美の両者の間において、極めて顕著な特性や差異を見出すことができた。

こうした社会的、家庭的な環境における生活的諸条件が、幼児のしつけにおける親の態度を規定し、ひいては、子どもの性格形成の上に、大きく影響をおよぼしているのではないかと考えられる。それが、どんなパーソナリティーへと形成されていくかは、重要な問題であり、今後の発展的な研究の一課題としたい。

＊　＊　＊